

第4章 長期化している不登校児童生徒への対応の在り方

1 長期化している不登校児童生徒への対応モデル事例

(1) 職員間の支援体制を生かした対応モデル事例

【インシデント：事例】

小学3年男子F。インフルエンザにかかり1週間欠席した後、体調が回復しても登校できなくなった。学校は欠席が10日を過ぎた時点で学年部を中心にした支援チームを編成した。

その後、拡大チーム編成を経て、全職員にFの状況を周知し、指導・援助方針を共通理解した。担任は、本人や保護者への関わりを続け、3か月後には別室への登校ができるまでになった。夏季休業中にも担任は関わりを続け、2学期からは教室に入れるようになった。

【学校が行った連携の様子】

1 校内支援チームを編成する（学年部中心・欠席通算10日）

① 担任からの状況報告

「欠席9日目に家庭訪問をしました。インフルエンザは完治しています。本人の表情は硬くあまり会話はできませんでした。母親は学校に行かないFの状態に困惑している様子でした。」

家庭訪問で得た本人や保護者の情報を学年部で共有する。

② 学年部職員間の共通理解

- ・ 「担任からの電話連絡や家庭訪問は継続していきましょう。」
- ・ 「本人とは雑談から会話を始め、リレーションづくりから試みてはどうでしょう。」
- ・ 「保護者の思いをできるだけ聞きましょう。」
- ・ 「学級の児童から情報収集してみましょう。」

本人や保護者とのつながりを切ることがないように、学年部として、今できることを確認する。

2 拡大チーム会議を編成する（拡大チーム員中心・1か月経過）

① 担任・学年部からの現状報告

「欠席する少し前ぐらいから友達が遊びに来なくなっていたことを母親は気にしています。ただ本人はそのことについて話しません。」

本人や保護者のその後に得られた情報を加えて報告する。

② 全職員での共通理解

- ・ 「時には複数で家庭訪問してみましようか。」
- ・ 「養護教諭のG先生の協力をもらいましようか。」
- ・ 「一度、保護者の方に学校に来ていただいて、校長先生にも同席いただいて今後のことをお話してみましようか。」

次のステップへの支援方法を全職員で協議し共有する。

3 今後の指導・援助方針を保護者へ説明する（管理職・担任・学年主任）

① 保護者との共通実践の確認

- ・ 「心配されていた友達関係について、本人は大丈夫だと言います。これからも少しずつ思いを聞いていきますね。」
- ・ 「本人の頑張りを褒めて励ましていきましょう。」
- ・ 「時間をずらして登校することや別室登校することも選択肢に入れていきましょう。」
- ・ 「学校、家庭でできることをそれぞれ明確にしましょう。」

「一緒に考えて取り組んでいく」という方針を伝える。

取り組めることを明確にする。

4 別室登校への働き掛けをする（担任・スクールソーシャルワーカー）

① 本人への登校への働き掛け

- ・ 「教育相談室への登校をしてみませんか。最初はFの好きな読書から始めてみたらどうかかな。」
- ・ 「登校時間は、みんなよりも少し遅い方がいいのかな。」

② 保護者への協力依頼

- ・ 「Fの不安を和らげるために、最初は一緒に登校してもらえませんか。」
- ・ 「登校したら保健室を訪ねてもらえると、養護教諭がFと一緒に教育相談室まで行くことができそうですよ。」

家庭訪問を実施し、別室登校を働き掛ける。

本人、保護者の不安を少しでも払拭できるようにする。

5 別室登校への配慮をする（担任・全職員）

① 別室登校（教育相談室）についての全職員への共通理解

- ・ 登校した際の職員の動きについての共通理解
- ・ 別室での学習内容についての共通理解
- ・ 別室での対応職員についての共通理解

② 本人、保護者への共通理解

- ・ 別室登校に伴う配慮事項を本人、保護者、職員で共通理解する。
- ・ 給食時間や作業時間の過ごし方について本人の意向を確認して保護者と共通理解する。

別室登校について全職員に周知する。

本人や保護者の不安の軽減を図る。

夏季休業中も関わりを継続する。

6 夏季休業中も関わりを継続する（担任・全職員）

① 事前に担任がFと対応できる日程表を渡しておく。

- ・ 「もしよかったら一緒に学校で宿題をしたり、お話をしないかな。」

② 登校できたら教室やその他の教室等へ一緒に行く。

- ・ 「2学期から教室へ入るとしたらどの座席がいいかな？」
- ・ 「せっかくだから少し校内を回ってみる？」
- ・ 「花の水掛けを一緒にやってみない？」
- ・ 「観察池の鯉を一緒に見に行かない？」
- ・ 「校内で行ってみたいところはないかな？」

教室に行くときは机にプリント類がたまっていたままだまになっていないか、机や掲示物に落書き等ないかを事前に必ず確認しておく。

2学期にも話題にできる植物や動物の世話を一緒にすることも一つのアプローチ方法である。

【この事例から言えること】

母親は、不登校になった当初、Fが登校しなくなったのは、「友達関係でのトラブルがあるのではないかな。学校で何かあったのではないかな。」と原因探しをしていた。しかし母親は、担任の関わりや全職員での共通理解や支援チームでの共通実践により、学校に支えてもらっているという思いが強くなり、徐々に学校への不信感は払拭されていった。同時にFも徐々に登校できるようになり、全職員の共通理解に守られ、教室へ入ることができるようになった。夏季休業中の担任の関わりも功を奏した。

(2) 関係機関との連携を生かした対応モデル事例

〔インシデント：事例〕

中学2年女子H。父親の転勤により、中学1年3学期から現在の学校に転入した。2月下旬から週に1～2日ずつ欠席するようになった。県外からの転入であったため、言葉やイントネーションの違いになじめず、友達もほとんどいない状態である。中学2年に進級してからは始業式しか登校しておらず、保護者は学習面の遅れを非常に気にしている。

【学校が行った連携の様子】

1 校内支援チームを編成する。(学年部中心・欠席通算2週間目)

- ① 担任から本人の状態についての説明
- ・ 「正直なところ、ほとんど本人との関係を作れていないのです。みなさんの御協力を頂く前に、少し担任として関わりたいと思います。」
 - ・ 「それは大事なことです。私も今、Hと一番近い存在は担任のI先生だと思います。なので関係を築くところからかな？とっていました。」
 - ・ 「具体的にはどんな風に関わっていきますか。」
 - ・ 「最初は学校以外の話題、例えばHが興味をもっているアニメ関係の話題とか習い事の英会話のことなどで話しやすい雰囲気づくりを心掛けたいと思います。」
 - ・ 「保護者は、この学校でやっていけるのだろうか、という不安が大きいと思いますので、十分、思いを聞いて寄り添ってあげてくださいね。」

担任としての思いを語る。

具体的な支援方法について協議する。

本人、保護者と一緒に考えていくという姿勢を打ち出す。

2 校内支援チーム会議で情報を共有する。(管理職・生徒指導主任・養護教諭も同席)

- ① 担任から現状の説明
- ・ 「以前よりずいぶんHとのコミュニケーションが取れるようになってきましたが、女性の先生の方がHは話しやすいのかな？と思うこともあります。養護教諭のJ先生、今度一緒に、家庭訪問していただけないですか。」
- ② チーム支援方法の協議
- ・ 「分かりました。今度、家庭訪問される時一緒に行ってみます。」
 - ・ 「関係機関との連携を図るのも方法じゃないかな。」
 - ・ 「校長先生、どんな関係機関がありますか？」
 - ・ 「ひょっとしたら学校に話せないこともあるかもしれないね。相談機関は、どうだろう。」
 - ・ 「校長先生、もしよろしければ相談機関とつないでいただけませんか。」
 - ・ 「分かりました。電話してみましよう。」
 - ・ 「よろしくお祈いします。では、最初に私の方から保護者・本人に相談機関の紹介をしますので、それを受けて、校長先生にお電話していただくことにします。」

次のアプローチの方法を協議する。

チームとして働き掛ける方法について協議する。

関係機関との最初のつなぎは、管理職に願います。

3 関係機関に連絡を取る。

- ① 担任から本人・保護者へ相談機関の紹介
 - ・ 「こんな相談機関がありますが、これからの対応について、相談されてみませんか。」
- ② 管理職（校長もしくは教頭）から相談機関への連絡
 - ・ 「保護者にそちらの相談機関を紹介しましたので、電話があると思います。対応をお願いします。連携させていただければありがたいです。」

担任から本人、保護者へ相談機関の紹介をし、意向を確認する。

関係機関との最初のつなぎは、管理職にお願いする。

4 関係機関が教育相談を実施する。

- ① 学校と連携してほしいこと、学校へ伝えてほしいことを本人、保護者へ確認する。

5 学校と関係機関が連絡を取り合う。

- ① 学校から関係機関へ相談の様子について尋ねる。
 - ・ 「先日、そちらに相談に伺いましたHの担任のIと申します。〇〇先生とお話をさせていただきたいのですが。」
 - ・ 「保護者から来所相談した、との報告を受けたところでしたが、Hの様子はどうだったのでしょうか。」
 - ・ 「Hさん、保護者とお話させていただいてI先生のことをとても信頼されていることが伝わってきました。I先生が良い関わりをしてくださっているので本人が随分心を開くようになってきた、とも語っておられました。」
 - ・ 「担任としてこれからどのように対応していけばいいですか。」
 - ・ 「I先生のことを一番話せる先生だとHが言っていました。先生が家庭訪問してくださっていろいろと話し掛けてくださることを、Hはとてもうれしいと感じているようです。これからは是非、Hと会話を続けてください。そして、学校のことも少しずつ意識し始めているようです。行事等もうまく活用して声掛けをしてあげてください。この学校の文化祭、どんな感じかなあ、なんて参加したいような会話もしていました。」
 - ・ 「そうでしたか。またじっくり話す時間を大切にしたいと思います。参考にさせてください。」

Hについて把握ができていた担任が連絡する。

来所相談により、学校として支援できる方法がないか、を探る。

学校として活用できそうな要素を今後の対応に生かしていく。

【この事例から言えること】

学校が、本人や保護者がゆっくりと思いを語る場所を紹介したことが、功を奏した。本人、保護者の思いを学校側が十分に把握でき、思いに寄り添った支援や対応ができたことは、前向きに進もうとしている本人や保護者へのやる気につながり、スモールステップではあるが、学校への信頼感に結び付いた。